



TITLE:

Local control of sphincter-preserving procedures and abdominoperineal resection for locally advanced low rectal cancer: Propensity score matched analysis(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

Okamura, Ryosuke

CITATION:

Okamura, Ryosuke. Local control of sphincter-preserving procedures and abdominoperineal resection for locally advanced low rectal cancer: Propensity score matched analysis. 京都大学, 2018, 博士(医学)

ISSUE DATE:

2018-01-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k20800>

RIGHT:

DOI: 10.1002/ags3.12032; Final publication is available at
<http://onlinelibrary.wiley.com/doi/10.1002/ags3.12032/full>

京都大学	博士（医学）	氏名	岡村 亮 輔
論文題目	Local control of sphincter-preserving procedures and abdominoperineal resection for locally advanced low rectal cancer: Propensity score matched analysis. (下部進行直腸癌に対する肛門温存術式と直腸切断術の局所再発率の比較)		
(論文内容の要旨)			
【背景】			
従来、下部直腸癌に対する標準術式は直腸切断術（APR: Abdomino-perineal resection）であったが、肛門温存術式（SPP: Sphincter-preserving procedure）が近年大きく進歩を遂げ、広く施行されてきている。しかし、進行癌に対する SPP の腫瘍学的安全性は、未だ十分に評価されているとは言えない。これまで、SPP と APR を比較した報告はあるが、十分な交絡調整はされていない。			
【目的】			
下部進行直腸癌に対する SPP と APR の術後局所再発率を比較し、SPP の腫瘍学的安全性を明らかにすること。			
【方法】			
腹腔鏡下大腸切除研究会所属の 69 施設において 2010 年から 2011 年に根治手術を施行された臨床病期 II, III の下部直腸癌患者 1,500 例のコホートデータを使用。研究デザインは、後方視的観察研究である。肛門縁から腫瘍下縁までの距離が 2－5cm かつ深達度 T3, T4 の症例を対象とし、傾向スコアマッチング法による交絡調整をおこない、SPP と APR のアウトカムを比較した。主要評価項目は 3 年局所再発率とし、術後有害事象発生割合、術後在院日数、病理組織学的切除断端陽性割合等を副次的に評価した。			
【結果】			
1500 例のうち、794 例が適格症例であった。APR の 338 例には、腫瘍がより肛門縁に近い症例や T, N 病期の進行した症例が多く含まれていた。一方で、SPP の 456 例には、術前治療を受けた症例、腹腔鏡下手術の症例、年間症例数の多い施設で手術がおこなわれた症例が多く含まれていた。13 種類の患者背景因子を用いて推定された傾向スコアを用いてマッチングをおこなうことで、背景因子の揃った両群 199 例ずつを抽出した。この患者群を用いて SPP と APR の比較をおこなった。観察期間の中央値は 3.5 年で、主要評価項目の 3 年局所再発率は、SPP 群 11%、APR 群 14%（ハザード比 0.77, 95%信頼区間 0.42-1.41）であった。副次評価項目として、SPP 群は APR 群と比べ、術中出血量が少なく（335ml vs 444ml, p=0.02）、輸血割合も低かった（15% vs 24%, p=0.02）。術後有害事象発生割合は SPP と APR の両群で同程度であった（38% vs 39%; リスク比 0.98, 95%信頼区間 0.77-1.27）。術後在院日数は、SPP 群で有意に短かった（19 日 vs 22 日, p<0.01）。切除標本における外科的剥離面の病理組織学的断端陽性は、SPP 群で 8 例（遠位切離断端陽性 1 例、周囲剥離断端陽性 7 例）、APR 群で 12 例であった。			
【結論】			
下部進行直腸癌に対する SPP 後の局所再発率は、APR 後と同程度であった。また、術後経過においても安全に施行されており、SPP は有用な治療オプションの一つである。多施設データを使用し、傾向スコアマッチング法による両術式の比較をおこなった報告はこれまでになく、当研究の妥当性は高いと考える。そのため、これらの結果			

は実臨床での術式選択における重要な根拠データとなり得る。			
(論文審査の結果の要旨)			
肛門近傍に位置する進行直腸癌に対する肛門温存術式と肛門非温存である直腸切断術について、両術式後の局所再発率を比較するデータは未だ不十分である。申請者は 2010 年から 2011 年の間に全国 69 施設で根治手術を施行された Stage II/III 直腸癌患者のデータを使用し、同じ腫瘍条件下における肛門温存術式と直腸切断術の局所再発率を比較し、肛門温存術式の腫瘍学的安全性を検討した。			
本研究では、腫瘍下縁が肛門縁から 2-5cm の間に位置し、進行度が T3-4 の直腸癌症例 794 例を解析対象とし、局所再発率を主要評価項目とした。肛門温存術式症例と直腸切断術症例の患者背景因子の偏りについては、傾向スコアマッチング法により調整した。肛門温存術式の直腸切断術に対する局所再発率のハザード比は 0.77 (95%信頼区間 0.42-1.41)であり、肛門温存術式による局所再発率の増加は認められなかった。			
以上の研究は、肛門温存術式の腫瘍学的安全性を明らかにし、肛門近傍に位置する進行直腸癌症例に対する外科的な治療方針決定に寄与するところが多い。			
したがって、本論文は博士（医学）の学位論文として価値あるものと認める。			
なお、本学位授与申請者は、平成 29 年 12 月 28 日実施の論文内容とそれに関連した試問を受け、合格と認められたものである。			
要旨公開可能日： 年 月 日 以降			